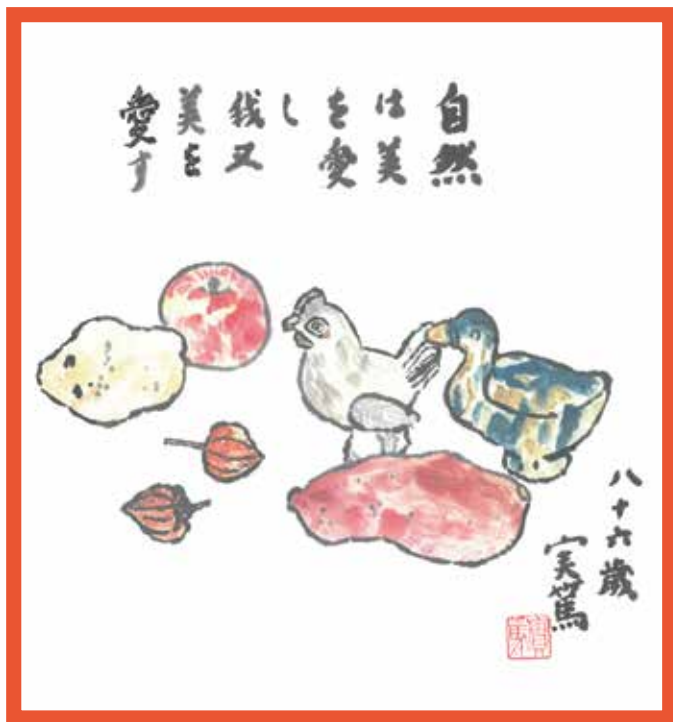


新しき村

1月号

2024年 Atarashiki-Mura
(since 1918年)



特集

武者小路 実篤「人生論」

新しき村を公益法人とする手続 (9)

調布市武者小路実篤記念館からのお知らせ 企画展・関連講座・春季展
新しき村創立から第26年・1943年 (昭和18年)

小島真樹さん追悼集



新しき村 一月号 目次

巻頭 新しき村のフォトギャラリー

人生論	武者小路実篤	16
「君も僕も美しい」	武者小路実篤	20
未来の人間		
過去の人間		
御挨拶	理事長 武者小路知行	22
新しき村を公益法人とする手続(9)	副理事長 千賀修一	24
二本の桜の大木を手入れ	専務理事 加藤勉	25
農×アート	村外会員 緒方賢	27
小島真樹さん追悼の言葉		
小島兄を偲んで	理事長 武者小路知行	28
村とともに六〇余年	副理事長 千賀修一	29
早過ぎた死	元理事長 寺島洋	30
小島真樹さんおわかれ間際の話	評議員 山田修一	32
小島真樹さんを偲ぶ	評議員 稲葉江利加	33
小島真樹さんからのエール	評議員 山田政一	34

君知る
小野菜
の美
美知る
事の何
ぞ嬉し
き



八十三歳
実篤
[Red Seal]

小島真樹さん	山田 順子	34
小島さんと私	村外員 浅見 洋子	35
小島さんの思い出	村外員 稲垣 喜弘	38
黄泉の国へ旅立たれた小島兄	村外員 吉田 真一	39
調布市武者小路実篤記念館からのお知らせ			
企画展「書が映す武者小路実篤」		40
関連講座 武者小路実篤と書―筆にこもる美しさ―		42
春季展「美術雑感」―実篤に影響を与えたもの―		43
◆これからの催し 観梅のつどい		45
◆ミュージアムショップ 実篤チョコ販売中		45
調布市武者小路実篤記念館利用案内		46
新しき村創立から第二十六年（埼玉の東の村の開設四年目）		47
一九四三年（昭和十八年）		47
会員たより		61
編集室・原稿募集		65
新しき村の会員募集・新しき村の地図		66
新しき村の精神		67

題字・絵 武者小路実篤

新しき村のフォトギャラリー

十月



中島の稲刈り



ミルククイーンの8分搗き



ミルククイーンの玄米



本社の手刈り



白雲荘脇の柿とメジロ



田んぼ小屋脇のナンテンの実



本社の柿の実



田んぼ小屋近くのクサギの実



旧本間宅前のカラスウリの実



キンモクセイの開花



ツバキの実



ヘクソカズラの実



ノブドウの実



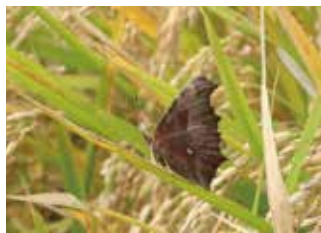
田んぼ小屋のキンモクセイ



旧本間宅前のベルベットセージ



鴻巣のダイサギ



キタテハ



ナガコガネグモの卵囊



ナツアカネ



公会堂周辺のタマスダレ



キバナノタマスダレ



武者小路知行理事長の講演会（毛呂山福祉センター）



今年初の燻炭づくり



新兵器納車ハンマーナイフ型
草刈り機



椎茸小屋の脇の剪定したヒノキ林の道



大信荘脇の柚子の木



柚子販売



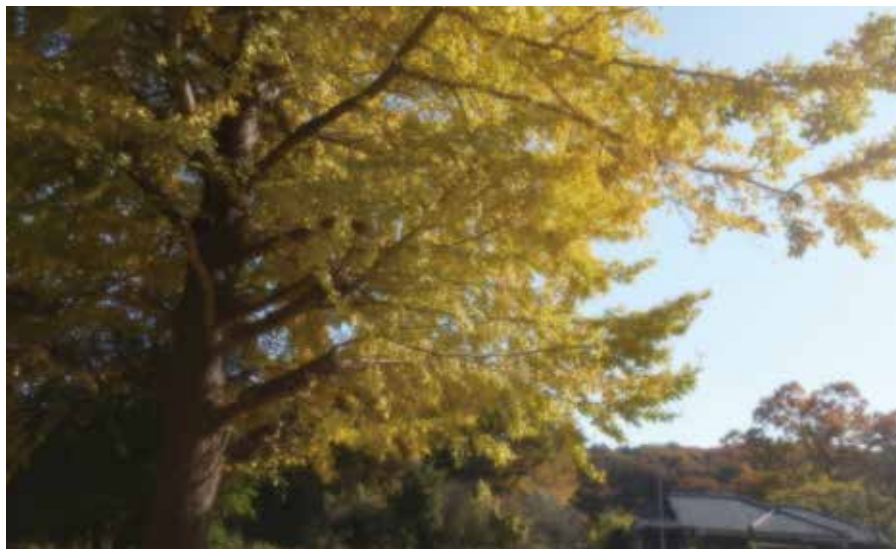
公会堂脇の柚子の実



さつまいも販売



炊事場入り口前のサザンカ



公会堂前のイチョウの木



ヒノキ林角のウメモドキ



南側雑木林のヤクシソウ



田んぼ小屋のヤモリ



大信荘前のアズマヒキガエル
(県準絶滅危惧)



柚子ジャムづくり（皮の煮こぼし）



最終の煮詰め準備



みんなでジャムづくり



種の煮詰め準備



実の煮詰め

◆ 餅つき



年末の餅つきは24日(日)17臼、28日(木)に23臼をつき終える。それぞれの協力者は24日14人、28日16人。29日(金)に最後の餅切りをして、予約客に届ける



餅米を蒸す



餅米を潰す



みんなで作業中



新メンバー



あんころ餅づくり



ついた餅を成型する作業。手前は丸餅、奥はのし餅。



からみ餅など勢ぞろい



からみ餅、あんころ餅、きな粉餅



切り餅

◆お正月に向けて



お手伝いの方々のお昼ごはん



正月のお飾りづくり



田んぼ小屋から旧鶏舎前の道の清掃



雑煮づくり



大王松周辺の紅葉



大愛堂脇のドウダンツツジ



南側雑木林のコゲラ



南側雑木林のアオゲラ



公会堂前にひさしぶりのオナガ



本社の田んぼにキジのメス



シジュウカラ



公会堂前のヤマガラ

人生論

武者小路実篤



武者小路実篤記念館所蔵

未来のことは未来の人に任せよう。現在の我等は理想の世界に遠いことを残念に思うが、しかし我等はいたずらに悲観するのをやめよう。過去の人間はもっと苦しい時代を生きて来た。人間は随分今までにいろいろの時代を通過した。そして我等はそういう時代を通過し、突破したものの子孫だ。意気地のないことは言わずに、我等は与えられた運命を人間らしく生かそう。

人間は何よりも生きぬくことが必要だ。死ぬまでは生きるのである。生きている以上は何かするのである。自分の仕事を忠実に果たすのが大事だ。しかし諸君等の仕事がかくたらない仕事だったら、適当にそれはやってのけて、そして自分の時間でこつこつ勉強すべきだ。

何もやりたい事がなかったら、まず身体を大事にし、そして読みたい本でも読むがいい。

そしてよき友でも見出すがいい。諸君は出世したかったら十人並みの誠実さでは駄目である。また十人並みの努力や勉強では駄目である。しかし世間的に出世したくなかったら、仕事によつたら、そうムキになる必要もあるまい。今の時代には金をとる仕事には、面白い仕事もあるから、その仕事にムキになれとは僕は言わない。

しかしムキになれる仕事を幸い諸君がやっているなら、どこまでもムキになってその仕事を忠実にやるべきだ。喜びはそのうちにあり、君たちの智慧は増し、才能もますますである。人間にとつての喜びの一つは進歩である。

人間はだんだん馬鹿になりたい動物ではない。だんだん下手になりたい動物ではない。ますます利口になり、ますます上手になりたい動物だ。いろいろのことがだんだんわかかってゆくことは喜びだ、健全な喜びだ。それ以上、この仕事はどうしたら更によくゆくかを考えることは立派なことである。同じく働く人々を、どうしたら幸福にできるかと考えるのも美しいことだ。しかし己れの力を知らないで、いいことさえすればいいと言うのは間違いだ。この世はいろいろの関係で進んで来ているのだから、その関係がなおらずに、一つの歯車だけをなおすというわけにはゆかない。無責任なことも性急もいけない。しかしいいと思うことはどこまでも考え、信用の出来る人と相談するのはいい。しかし、不平や反感で事はなかなかうまくはゆかない。親切と、同情と、察しが必要だ。人間同志の関係はなかなか微妙だ。人間は誰でも世の中をよくしたいとは思ってはいるのだ。しかしな

なかならないのだ。だから自分の力を買いかぶるのはよくない。しかしこうすればよくならないことが、わかっていたらその考えを黙っているのも惜しい。友人に話すのもいいだろう。信用のおける人に聞いてもらうのはなおいいであろう。

この世の中をだんだんよくすることは美しいことだ。よくならないにしろ、間違いない意見なら、どこかに友を見出すだろう。孔子は「徳孤ならず、必ず隣あり」と言った。ききめはないと思うところに、いつかききめはあらわれてくる。

それよりまちがいのないことは自分をよき人間にすることだ。親切な信用のおける、真面目な人間に築きあげることだ。よき本を読むことも必要。考えることも必要、実行して見ることも必要。

人間が生長するには、まず教わるだけ他人から教わり、自分でそれがまちがいであるかどうか考え、しかる後に実行することだ。

いいと思ったことはどんな小さいことでもするがいい。早起きがいいと思えば早起き、勉強するがいいと思ったら勉強、仕事を忠実にしようと思ったら忠実に、怒るのをやめようと思ったら怒らないように、怠け心と戦う方がいいと思ったら戦え。

どんな小さいことでも少しずついいことをすることはその人の心を新鮮にし、元気にさせる。

自分をよくする余地がある限り自分をよくする。自分をよくすることは間違いないこと

だ。しかし他人の思惑を考えて、いいことをするのは面白くない。他人はどうせ冷淡なのだ。注意して見てはいない。苦心の効果は他人本位だとゼロにちかひであろう。そのために馬鹿気ているとか、つまらないという考えを起こすなら、初めからやらない方がいい。よくするのは自分を元気にするため、自分の気持ちを充実させ、何となく自信を得るためなら、必ずその効果は挙がる。そして勇気もわく。しかし他人本位でやったら偽善になり、かえって他人に嫌われる。

自分をよくすれば、自然や、人類に愛されることはたしかだ。もし自然や人類から愛されず、内から生命がわいて来なければ、それは本当のいみで自分よくしたのではない。そこに何かまじりものがある。

真に自分を少しずつでもよくしてゆくことが出来たら、自ずと愉快になり、また力がわいてくるのは事実である。決心を新たにして、勇気がわかかなかつたら、それは決心を新たにしたのではない。

『武者小路実篤人生論集2 私の人観』

(講談社) より



「君も僕も美しい」

武者小路 実篤

未来の人間

未来の人間

君達こそ人間らしく生活してくれるだろう。

愚かなことをくり返さずに

幸福に生活してくれるだろう。

すべての人がよろこべるよう

働いてくれるだろう。

未来の人間、

我等のまいた種をかり入れる人間、

出来るだけよき種を

過去の人間

過去の人間よ、

君達が地上にのこした

働きのつみかさなりを

我等は喜びをもって

生かしたく思っている。

君達は苦しい処を

よく生きぬいてくれた。

そして地上に

いろいろの仕事を仕出かしてくれた。

それは一朝一夕では出来ないことだ。

我等はまけるだけまきたく思っている。

よろこびをもってとり入れてくれ。

未来の人間、

君達を他人とは思っていない。

君達こそ

大きな仕事を

地上に完成してくれる人間だろう。

人間の栄光の為に働いてくれ。

人間らしくよろこんでくれ、

君達

未来の人間。

あらためて君達に感謝する

君達の苦心、血、

労働、愛を

無意味に消えさせないつもりだ。



〔武者小路実篤詩集〕（中川孝編、大和書房）

これからの「新しき村」のために何ができるかを考え、
一步を踏み出してほしいと思います。

組織としての「新しき村」は、これまで以上に、実
篤の精神を村の外へも発信してゆく必要があると思
います。

今この世界は、国と国の直接の争いだけでなく、い
ろいろな対立があり、さらにその対立を煽る様な行動
や、その行動に対応して必要以上の危機を唱えること
によって、多くの国や組織が軍事力を強化しようと
しています。しかし、今私達人間が為すべきことは他
にあるのではないのでしょうか。互いの違いを認め合っ
て、相手を尊重すること。それこそが実篤の中心的精神の
一つである「君は君、我は我也、されと仲良き」の心
ではないでしょうか。私達「新しき村」はこの言葉と
その精神を世界に発信する時だと思えます。



新しき村を公益法人

とする手続(9)



副理事長 千賀 修一

令和四年五月二七日埼玉県に対し、当法人を一般財団法人から公益法人に変更する申請をしてから埼玉県から質問がありそれに対して回答するというやり取りが七回ありました。

本年一月一日埼玉県との担当者と連絡をとり書面の補正(修正)申請を行い、この補正により埼玉県の事務局としての準備は整ったとの確認を得ております。

現在の公益法人制度は、埼玉県が公益認定の申請を受付けてから、事務局で申請書に対し公益認定法に定める公益法人に該当するかについての整理をした後、民間有識者からなる合議制の公益認定等審議会に書類を回し審議会において審査することになっています。

公益認定審議会の委員は、民間人から選任された委員五名(後記)が、公益法人として認可することが相当であるかを審査し、埼玉県知事に答申することになっています。

山来洋子(会長・税理士)・小笠原薫子(会長代理・公益会計士)・草地未紀(駿河台大学法学部教授・長沼良行(公益財団法人公益法人協会理事)・渡辺晶子(弁護士)

現在の予定では、本年二月上旬に審議会が開催される予定になっており、問題がなければ「公益法人法に規定する公益認定の基準に適合すると認めるのが相当である。」との答申が委員会から埼玉県知事宛に出された後速やかに埼玉県知事から当法人に公益認定が交付される運びとなります。

新しき村の年間集会

- 四月 花の会(四月七日午後一時より)、評議員会兼会員大会(次年度事業計画、予算承認他)
- 七月 二一日午後一時半、評議員会兼会員大会(事業報告・決算書類の承認他)
- 八月 労働祭(第二日曜日を最終とする一週間)
- 九月 第三日曜、埼玉での「新しき村」創立記念祭

二本の桜の大木を手入れ



専務理事 加藤 勉

二〇年以上前から仕事の関係でお付き合いが始まり、時には酒を飲み交わすこともあった小島真樹さんが昨年暮れに旅立たれました。

豊富な知識と夢をお持ちで、常に物事を冷静に判断し行動していた小島真樹さん。私にとつて最も尊敬する大先輩で、村のために率先して裏方を引き受け、毎日忙しく自転車で町内を飛び回っていた姿が想い出されます。今、村は冬の寒さとともに何とも言えない寂しさで日々を耐え忍んでいます。小島真樹さん、どうぞこれからも新しき村を見守っててください。心からご冥福をお祈り申し上げます。

さて、昨年七月号の機関誌では村の現状を、そして一月号では記念祭の様子を紹介させていただきましたので、

今回はその後（秋冬）の様子を紹介いたします。

お陰様で公会堂のトイレ改修工事も順調に進捗しており、間もなく竣工を迎えます。外見はできる限り現状の姿を残しつつ、その一方で便

座や洗面所等は時代に合わせた改修となっております。次回の機関誌では、改修後の様子を写真で紹介する予定です。また、八角井戸の改修も建設当時の面影を感じとっていただけるよう大規模改修は控え、部分改修のみいたしました。

長年、増田荘の前にどっしりと構え立っている桜の大木（村では川島桜と呼んでいる）は、八〇年近くの歴史を刻んでいる村のシンボルの一つですが、老木となり樹木医からは“倒木の危険あり”との診断結果が出されています。



増田荘前のソメイヨシノ



八角井戸脇のしだれ桜

幸い大木の脇からは新木が成長してきていますので、この枝を生かした部分は近日中に伐採することになっています。併せて八角井戸脇のしだれ桜も腐食部分がありますので、この二本の

村の作物は全て完全無農薬で、中でも米は今年も多くのリピーターにお買い求めいただいています。また石うち餅も大人気。お客さんの希望に答えて三月まで餅づくりが続きます。

今は冬真っただ中ですが、村ではすでに春・夏の農作業に向けて準備が進められています。4月初旬には早くも竹の子の収穫時期を迎えます。昨年までは小島真樹さんに収穫と販売をお願いしてきましたが、今年からは私たち法人事務局の職員が後を引き継ぐことになっています。小島真樹さんが担当



ぎんなんの販売

桜の木の手入れを進めてまいります。

次に農作業の状況について紹介します。

秋は農作物の収穫時期で、今年も各種野菜をはじめ、米、さつまいも、落花生、柿、銀杏、柚子など多くの農作物を収穫しました。

十一月一日の埼玉県民の日と十二月二日の冬至には、柚子とさつまいも（本来はかぼちゃですが作付けに失敗）を無料で来村者や近隣住民にお分けし大変喜ばれました。

していた時のように、多くの地域住民に喜んでいただけるよう精一杯準備を整えていきたいと思っています。

掲 示 板

評議員会（兼会員大会）

四月十七日（日）二時半より
新しき村公会堂にて

令和六年度予算を中心に話し合います。村の将来についても意見の交換をしたいと思いますので、村外会員の方は非ご出席ください。

農×アート

村外会員 緒方 賢

農民と画家への敬意と憧れは、私は幼稚園に入る前から持っている。なので「農×アート」をテーマに掲げる美術展が大好き。

足を運んだのは

- ① 「田園の夢」(福島県立美術館 二〇〇四年)
- ② 「田園賛歌 近代絵画に見る自然と人間」(埼玉県立近代美術館、山梨県立美術館ほか 二〇〇七―〇八年)
- ③ 「土とともに美術にみる〈農〉の世界」(茨城県近代美術館 二〇一三年)

それぞれアプローチが異なる上に、図録の解説もデーパーなので興味が尽きない。

特筆すべきは①。A四サイズの図録で、三ページにわたる学芸員の増淵鏡子氏が実篤先生や新しき村のことなどの論考を書いておられる。

④として、農村画家の巨人・ミレーの今までの展覧会を列記したいのだが、人気画家だけあって数が多いので省略する。そのかわりミレーを激賞する実篤先生のお言葉を

転載します。転載元は財団法人新しき村発行の雑誌「この道」(一九六四年二月 新しき村特集号)。表紙は実篤先生チヨイスのミレーのデッサン「耕す人と種まく人」。

ミレーの素描

新しき村号なので、僕の大好きな画家の一人、ミレーのデッサンを選んだ。僕はミレーを画家としても尊敬しているが、人間を愛しているその愛の深さでも感心している。ミレーの画はもう古いと思っっている人も多いと思うが、僕はミレーは一個の人間とし、又自分のかくものを本当に愛し尊敬してかいている点でこの位い純な真剣な画家はないと思っっている。一時画家として新しい画家にくらべて過去の人のような感じを受けた事もないとは言えないが、この頃又新鮮な感じで好きになっっている。今度出した画を見てもミレーのミレーたる所が十分出っいて、新しき村号にふさわしい所があると思っっている。ゴッホやホイットマンがミレー好きだった事もよくわかるように思っう。



ジャン・フランソワ・ミレー「落穂拾い」
(1857年) 画像：Wikipedia より

小島真樹さん追悼の言葉

昨年一二月に逝去された小島さんへの追悼の言葉を掲載します。

小島兄を偲んで



理事長 武者小路知行

小島兄の訃報は、一二月二二日の午後二時過ぎに、村の専務理事の加藤さんからの電話で伝えられました。その数時間前に緊急入院したという連絡を受けその容態を気にしていたのですが、実は三日前の一九日に村を訪ねた時に、小島兄から声を掛けられ、埼玉医大国際医療センター内の喫茶コーナーで三〇

分程度話をしたばかりでした。その時に、一〇月に自転車で転倒しケガをし、その検査からガンが見つかり、手術をして元氣を取り戻したと聞かされ、本人は、「これが本当のケガの功名。救われた命を大切に、これからは村の為その存続に向けて自分の全力をつくすつもりだ」と熱く語っていたこの姿からは、とても信じられない連絡でした。

この二年程は会うたびに、どうすれば村を存続させることが出来るかという話に終始していたような気がします。ここ数年は長期滞在として、村内に居住し、主として竹林の整備を担当してきていました。村の存続の為には、若い人材が入ってくれるのが一番なのは当然だが、村内会員となれる年齢を越えた人でも村内に居住し、村の仕事をするとというシステム【長期滞在】を発案し、自ら実践することで、後に続く人を作

ろうとしていたと思います。

今年新しい村は、大きな変革の年を迎えようとしています。そしてその時の大きな戦力となってくれたであろう小島兄をここで失うということは、実に残念ですし本人も心残りであろうと思います。だからこそ私達は小島兄の思いも合わせて前に進んでゆくことこそが、小島兄への感謝の気持ちを表すことになると思います。

これからの「新しい村」を見ていて下さい。



小島さんは、昨年解体した村の牛舎の前で朝日新聞社の取材を受けた(朝日新聞 2023年2月13日の夕刊)

村とともに六〇余年



副理事長 千賀修一

一〇〇年続いた村を今後も継続できるような組織にする必要があると思いい村外会員になりました。

昨年一二月末日、専務理事の加藤さんから小島真樹さんが逝去されたとの電話をもらい、大変驚きました。私は平成三〇年三月に村外会員の前田速夫さんの著書『新しき村』の百年』を購入し、村の事を初めて知るとともに村が経営的に厳しい状況におかれている

ことを知り、同年五月、初めて村を訪問し、村の土地・建物を見て、

知り合い、同年八月一日村の労働祭に参加したとき、小島さんに村の中を歩いて村の施設について説明してもらいながら案内してもらいました。それ以来小島さんから「新しき村」への投稿を依頼されたり、一昨年理事に就任してからは理事会で毎回お会いし、小島さんはいつも村をよくするために意見を述べておられました。



写式除幕の日の9月5日令和5年。真樹小島が左一番。

ました。その後同年五月、初めて村を訪問し、村の土地・建物を見て

当法人を公益法人とするための公益認定を申請した後、令和四年六月二四日、埼玉県庁に理事長と私と倉敷理事、大橋監事とともに小島さんも監事として出席されました。そのとき小島さん

が埼玉県の担当者に対し、新しき村の精神に基づいて設立され運営している村の実情を詳細に説明し、是非公益法人として認定してもらいたいと熱く話されていたことを思い出します。

本年二月に公益法人化され、いよいよこれから公益法人として改革に着手するとき、小島さんからこれまでの経験を生かした提案をしてもらい、小島さんと共に改革しようと思っておりますが、これができないことになり大変残念な思いです。

小島さんは、学生時代から新しき村会員であったとのことで、新しき村の精神に基づいて六〇年余生生活をしてこられ、一昨年から長年希望された長期滞在者となり生涯現役として村で生活できたことは、小島さんにとって大変幸せであったと思います。どうぞ安らかにお休みください。

早過ぎた死



元理事長 寺島 洋

暮も押し詰まった朝、倉敷兄からメールが届いていた。小島兄の突然の死の知らせだった。つい先日、村の元日の会食の誘いの電話があったばかりだった。日頃から健康を看板にしているだけに何かの間違いかと思った。

小島兄との付き合いは六十三年位になるだろうか。一九六〇年代の自分が二〇才の頃、神田神保町の新村堂にも、今も存在している「新しき村」の木曜会があった。当時、村の機関誌が「新しき村」から、「この道」に代わった時で、先生が、当時の薄い「新しき村」を、

書店に並べられる立派な機関誌にした
いとの考えで、会費で足りない分を自
費で出版されたことを後に知った。そ
の為か、会員には若い学生が多かった。
皆な本屋で「この道」を見つけ、武者小
路実篤自から出席する会は魅力があっ
ただろう。自分は「若い生活」という
若者向けの月刊誌で村を知り、新村堂
の木曜会を知った。そこに小島兄が出
ていた。常連というのではなく、時折
出席して来る若者だった。多分自分よ
り一才若い、昭和十八年生まれではな
いかと憶えている。

先生が「この道」を書店へ出したい考
えの中には「新しき村」をもっと世間
に知らせたいという思いがあり、その
考えが当時の「この道」に書かれている。
併し、当時の木曜会の出席者は、大学生
が多く、入村希望者は居なかった。自
然に会員から離れていく人も多かった。

併し、その後変わりなく村との繋がりを
をもつ人も居た。小島兄もその一人だっ
たろう。その後忘れた頃に村に仮入村し
たいと申し込まれた。仮住まいの入村
として、仕事も特別受け持つて貰わず、
竹林の整備が主なものだったろう。そ
れ迄の村外の一会員との付き合いから、
急に交遊が多くなった。塾の仕事との
掛け持ちで、当時から交流の多い人だっ
た。その頃だったか小島兄を知った木曜
会時代は、村外会員ではなく、「この道」
の購読者だったことを聞いた。何故村外
会員ではなく、購読者を選んだのか訊
かなかつたが、そこに小島兄らしいこ
だわりを感じた。東京の保谷でも、毛呂
に住んだ時も、町会議員に立候補に立っ
た時、どうして、その道を選んだのか疑
問に思ったがそれも訊ねなかつた。そ
の度に彼は当選を信じていただろうが、
地盤も看板もない選挙に何度も挑戦す

るのは彼らしいが、自分は応援しないことを伝えていた。

彼は読書家で、自家の個人誌「草」を発行していることは誰でも知っているだろう。毛呂中、思いがけない人から受け取っていることを聞いた。時には迷惑だが云えずに困っている人も居た。空気を読めないのではなく読まないで生きても憎めないのが小島兄という人だった。



小島真樹の個人誌「草」

読書家で思い出すのは、小島兄が秋田に引越していた時、自分の村誌の原稿を読んで早速感想をくれた。それは野鳥観察作家、伝部富之助の「野の鳥の生態」に触れた原稿に対して。伝部富之助は秋田では有名であることを教えてくれたものだった。今、彼が、村外会員か、読者かは知らない。併し、浅田兄から雑誌を引きついだ兄は、広く執筆者を集めた。村外との関係も多く、誰でも、村外

の中心会員と思うだろう。小島兄にとっては、村外も村内もなかったのだろう。私達の知らない所で村の講演をしたり、執筆している奇様な村人として忘れられない人だろう。



令和5年4月2日評議員会兼会員大会の小島真樹氏（上段 右から3人目）

小島真樹さん

おわかれ間際の話



評議員 山田修一

この原稿は村外会員の家で書いてい
る。窓からは右手に都電、左手に竹炭窯、
その先には現在耕作していない枯れ草
に覆われた畑が広がっている。小島さ
んはこの場所で「豚を飼う」ことを構
想していた。

昨年十一月の後半に手術で入院す
ることを聞いた。十二月は竹の間伐の
時期に当たる。病み上がりの重労働は
きついだらうから「今回はわたしはや
りましょうか」と聞いたが、「自分でや
ります。いざとなれば頼めるあてがな
いわけではない」とのことだった。

十二月十七日、前日から村に来ていた
わたしに小島さんからの着信があった。

「山田さんにお願ひする作業について腹
を決めた」と言う。小島さんと落ち合う
と、自転車でバイパスの向こう側の竹林
に向かった。小島さんは村の竹林は自
分でやるので、わたしにはバイパスの
向こうにある竹林の伐採をしてほしい
とのことだった。道中、「中京大学から
放射線の除染に竹炭が有効であるとい
う研究結果が出た」と話をされていた。

十二月十八日、再び小島さんからの着
信があった。わたしは村の敷地外である
バイパスの向こう側の竹林作業はお断
りすること、村の竹林であれば喜んで
作業することをお伝えした。小島さん
は「村の仕事と言えないこともないの
ですが・・・」と言っていたが、わた
しは自分の気持ちを再度、お伝えした。
「それから山田さん、次の木曜会は忘年
会をするので都合がつくなら参加して

ください」これが小島さんとわたしの
最後の会話となった。

十二月二十九日から一月二日かけ
て村の孟宗竹の伐採をした。小島由江
さんに相談をして、小島さんの道具を
お借りして作業をした。十二月三十日
は山田政一さんが来てくれた。小島さ
んがやる予定だった作業を応援してい
る気持ちを感じた。

一月六日と八日は真竹の伐採をした。
北側の斜面に密集している場所に太陽
の光が差し込むように片付けた。

二十年間、この作業を繰り返していた
小島さん。暑い夏にボール一本で牛舎
の解体作業をやり遂げた小島さん。「と
ころで山田さん、山田さんはどうした
ら日本がよくなるのかを考えています
か」とわたしには持ち合わせていない
スケールの問いを繰り返していた小島
さん。手術後しばらくは自転車に乗る
のはやめた方がいいと伝えしたが「だい

じょうぶです」と言い続けた小島さん。村外会員の家の机に中京大学の研究レポートが乗っていた。「山田兄、紀要は見たら返してください」というメモが貼ってある。十二月十八日の電話の後置いてくれたものだろうか。お返しはできなくなってしまったのでわたしは預かります。

小島真樹さんを偲ぶ



評議員 稲葉 江利加

この原稿用紙の表紙に、メモ書きで「どうぞ大いに書いてください 小島 拝」と青い色鉛筆でかかれた紙が張ってあった。カレンダーの裏紙で、それがセロハンテープで無造作に斜めに止まっている。小島さんはもういないん

だなあ。私が村の雑誌のお手伝いをすることになった時に、小島さんが送ってくれた原稿用紙だ。

長く村の雑誌の編集をされた小島さん。

長く村の近くに住んで、村に通った小島さん。

最後は村に住んだ小島さん。

長男と次男が中学生の時に職業体験で村に数日滞在した時に、夜に「英語を教えます。」と言って、夜白雲荘に来てくれたそうだ。さびしいと思って来てくれたのだろうと思っている。次男は竹炭の作り方も教わったと言っている。二十年近く前の話だ。

バイデン大統領と同じ年、というのが最近の口癖で、「どこも悪くない。まだまだやれる。」と言っていた。それが、「自分ももう八十だから。」に変わって、「？」と思ったのも束の間、あつという間に私達の前から去ってしまった。

神保町の駅前で、通りをずっと眺めていた小島さん。声をかけると、「自分はどうして街の移り行く様を見ているのが好きなのだ。」と話した。

百周年の時には「村の使命は終わったのではないか。」と話していたが、一転、「まだ終わっていない。」とし、どうすれば存続できるか、熟慮していた。外に職業を持って村に住む案を出してきた時、まさか小島さん自身がやるつもりで発案しているとは思わなかった。村の根本を見直す、という点では賛成だったが、皆の前でもっとそれを表明してほしい、と思っていたようだった。

私は小島さんに何かを言われても、その裏に何も無いのを知っているので安心して本当のことが言えた。

村のことに一生懸命だった。「村外会員がまた村に泊まれるようになります。」と言って、それを実現した。小島さんの一生懸命さを笑える人はいないと思う。

小島真樹さんからのエール



評議員 山田政一

◇一月九日に『草』通信第二号が届いた。

一二月二二日に急逝された小島真樹さんが生前に作り上げていた『草』通信の原稿を、由江奥様が代わってプリントしてお送り下さった。

『草』通信の初めに次の言葉があった。

みんなが反対すれば
戦争をやめさせられる

「・・・沖縄の反戦運動家・阿波根昌鴻（あわごんしょうこう）さんの著書『命

こそ宝』中の、元国際人権連盟議長のロジャー・ポールドウィンさんの言葉だという・・・」

◇小島さんは、このシンプルな言葉を実際に具現化する事の困難さを思うと同時に、自然で、かつ有効な方法ではないかと考えていた。

小島さんの、世界平和と新しき村への情熱は生涯に渡り枯れることなく、心身ともに若々しかった。

『草』通信第二号はなお続き、こう結ばれている。

日々好日

○謹賀新年

年賀の代わりとさせていただきます。わたしの近況は本文にあるとおりです。

本年もよろしく願います。

◇ひとはそれぞれ個性があり、考えも行動も思いの強さも違い、無理に

一括りにすると歪みが出てしまう。しかし個性の壁を超えて共振するものを小島さんは発信していたのだと思う。その響きを思う。

（編者注：『草』通信第二号より文を一部引用）

小島真樹さん

山田 順子

いつも、いつもお元気だった小島さん。村に行けば自転車に乗って、いらっしやいぐと笑顔で迎えて下さった。

泣きごとなど言わず、いつも前向き、小島さんは村外会員のありかたとしての希望の星だった。好奇心旺盛だった彼は今も天国を自転車でまわっている様な気がします。

生涯現役だった小島さん、天国でもお元気にお過ごし下さいね。

小島さんと私



村外会員 浅見 洋子

寒い朝、ポストの中に封書の手紙を見つけた。差出人を見ると小島由江と：：

小島さんの奥様からだ・・・この手紙の中に小島さんが最後に書かれた一人雑誌「草」が入っている。

昨年の暮れ、余りにも突然の訃報に驚き心の整理がつかぬまま年を越した、村に行けば小島さんに会えると思っていた・・・私は奥様からのお手紙を胸にあて暫く手紙の封を開ける事が出来なかった。

おそらくこの一人雑誌「草」は毛呂山町のお知り合いのたくさんの方々に

自転車でお配りになっていたはずである。今までは、いつの間にかポストに投函され必ず小島さんらしい大胆な字で、近況のコメントが添えてあった。

「小島さんが来て下さった：」と、まっしぐらに自転車を走らせてお帰りになる小島さんの後ろ姿を思い笑みを浮かべていた事を今悲しく思いだす。

村に行くとき「浅見さん」と遠くから声をかけて下さった。

「今月の喜楽会に来て下さいね」とそう言いながら自転車で乗ったまま通り過ぎる。いつもの小島さんが村にいる。

「浅見さん、井戸の屋根、アトリエ長杉荘と同じ色にしました、いい色ですね・・・」

「桜が終わったら筍掘りが始まりますから・・・」

村では竹の担当になり竹の事を勉強

する為に日高市の新井竹芸に行ってきたと話された。

「小島さんが話したのは、私の兄ですよ、新井竹芸は私の実家です」小島さんの驚きは半端ではなく「なんとという奇遇だろうと・・・運命か・・・」そんな会話が思い出される。

小島さんに誘われて喜楽会に参加するようになったのはいつだったろうか思い出せない。

この喜楽会は毎月第四土曜日の夜七時から大信荘で行われている座談会の事であり、実篤先生がご存命の頃からあったようだ。ある方は感動した新聞の記事読み、ある方は生きる事の疑問や社会のあり方を、また新しき村の事であったり思い思い話す会であった。

毎回来られる方は五、六人、毛呂山町の教育を考える会、郷土史研究会また文

芸会など積極的に参加されていた小島さんはお知り合いが多く、不思議に思うほど経験豊富でさまざまなジャンルの方々がお見えになった。村の夜は暗い、電灯も無い冬の喜楽会は月と星が手に届く様だ・・

大信荘に薄明かりが灯っている。

こんばんは・・。「いらつしゃい・・どうぞお入りください」

小島さんの大きな声で薄明かりがパツト明るくなる。

床の間には実篤先生の写真と書物、中央の赤い座卓の上にお茶の用意、伊勢屋さんの和菓子、そして必ず村に咲いている季節の花が飾られている。

「浅見さん、毛呂山町で二件のお店が凄いと僕は思います。伊勢屋さんの和菓子、美味しいです・・もう一件は本屋さんブックランドエル。どんな本でも揃えられますよ・・」言葉通り伊勢屋

さんの和菓子がいつもある。

お掃除に準備、大変だったはずなのに小島さんはいつも笑顔で迎えて下さった。優しいおもてなしの心が感じられる、座卓の上に飾られた花はいつも私が頂いて帰った。

代官屋敷の離れを移築した大信荘での喜楽会は春夏秋冬趣きがあった。

春は村の桜が月明かりで美しい・・

夏は縁側を全開して蚊取り線香を焚く。遠くから花火の音が聞え、時おり大きな蛾が仲間に入れてと乱入、扇風機は首を振っている。

秋は庭から聞こえる虫の声、コロコロガシヤガシヤチンチロリン何種類もの虫達が一斉に鳴いて私達の話を邪魔した。

平成令和と時代は流れ止まる事はありません。しかし喜楽会は実篤先生が居られた昭和のまま・・

小島さんが当たり前の様にされた喜楽会の在り方とおもてなしは小島さんだから出来た事だと思えます。今この複雑な時代にこの素晴らしい時間を過ごさせて頂き小島さんと同じ時間を共有した事を心から感謝せずにはられません。

「喜楽会では実篤先生は黙って話しを聞いていました・・でも時おり眠っている時もありました」小島さんはそうおっしゃっていましたが小島さんもお話を聞きながらこっくりこっくりと気持ち良さそうに眠っている事もありました。

でも・・皆さん笑ってそつとそのままに・・私達も癒されておりました。

その喜楽会で小島さんが

「村外会員の家があるけれども何年も放置されている、誰か掃除してくれる人

はいないだろうか・・」そう言って小島さんは私の顔を見てニヤリと笑った。

「う・・」小島さんと目が合った・・

小島さんが摘んで来られた花も私をじっと見ている。

「・・私・・家が近いから掃除しましよ
うか」

いつも一緒に参加している角田さんが私の隣でパチパチと手を叩いた。「がんばれ」小島さんは満面の笑みで「ありがとうございます」大きな声で讃えられた。

後日小島さんを訪ねると「浅見さん僕はねえ本当に嬉しかったです、ありがとうございます」と何度も頭を下げられ村外会員の家の鍵を渡された。

現在村外会員の家は綺麗になり、たくさんの方が宿泊されている。奥の間は時おりギャラリーとして使われる様になったが、荒れ放題の家の修復改善

掃除は時おり心が折れてしまいそうになった、そんな時決まって小島さんと和田さんが顔を出して励ましてくれた。

一人で掃除をしている事をSNSに投稿すると、たくさんのお友達やギャラリー関係者そして聖望学園の後輩が掃除の応援に来て下さったのである。

喜んで下さったのは小島さんだった。「浅見さんは聖望学園でしたか・・僕の息子もそうです。奇遇ですね」そして小島さんは「浅見さん・・掃除して良かったですね」とニヤリと笑った。

そうなのです。聖望学園が甲子園出場で燃えたあの夏。小島さんのおかげで私は掛け替えのない体験をさせて頂いた事を心から感謝している。

「浅見さん、僕の家に浅見さんと係わるものがあるのですよ・・家に来て探してみてください・・」

行く約束をしていたのに、小島さん何だったのですか・・

まだまだいっぱいお話し、したかったのに・・寂しいです。

小島さんが大好きな寺山修司さんの短歌

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし
身捨つるほどの祖国はありや

祖国を理想に代えると僕の心境にぴったり合うと何度もおっしゃっていましたね。

小島さん：あなたは「身捨つるほど」新しき村を愛していた・・その愛は誰にも負けない愛である事を私は知っています。

新しき村でたくさん頂いた小島さんとの思い出はずっと大切にしたいと思います。

小島さんの思い出

村外会員 稲垣 喜弘

小島さんを一言でいえば、村で一番元気な人です。ほんの一年半のお付き合いでしたが、それが私の印象です。

自転車をこいで大きな声であいさつ、理事会や評議員会でやや突飛とも思える発言、牛小屋の解体、竹の子を掘る姿、そして語尾に力を入れたしゃべり方もです。実行力をとても重視されていた方なので元気に映るのかなと思っております。

小島さんとの仕事は、昨年の創立記念祭の幹事をされた小島さんのお手伝いで、ポスターと舞台のリーフレット作成でした。久しぶりの開催で簡単ではないことは想像できたはずですが引き受

けられ、一人でほとんどの準備を進められました。舞台の出席者が決まらず苦労されたと思いますが、人脈の広さを感じました。人集めに注力したとおっしゃいましたが、公会堂は座る場所がないほど人が集まりました。一方で毛呂山町誌に載せた開催時間と私たちに知らせた時間が違っていたり、ポスター作りでも約束の時間を毎回守らないなど、鷹揚なところに驚かされたりもしました。それでも決して憎めないのは人徳だと思えます。

個人発行の「草」、冊子「新しき村」の投稿では、新しき村を、六時間の義務労働を果たしたら、衣食住は保障され、後の時間は自由に自分を生かす時間に使える社会と言いつ切られます。それを読むと考えます。万人が平等に自己実現を図れる場所ではとか、村を良くしてもらうために、入村を許可された人

たちが暮らす場所ではとか。小島さんは本物（人として本来あるべき生き方）を目指し、考え続けた方だと思います。村とはという問いかけを大事にしたいです。そして常に考え続けることを継承していきたいと思えます。文明が減びたのは思考を停止したときと分析する研究者がいます。

今の村は再生に向けて、一人として欠けてはいけない陣容でした。それでも小島さんが活躍された暮れのお餅つきも沢山の方々に集まっていたいただき無事終りました。小島さんが管理されていた竹林の間伐もお正月返上で対応された方がいます。小島さんが作ってきたネットワーク、人脈が今こそ実を結ぶ感じがします。

私は小島さんの元気なところを見習い、楽しくみんなで村の仕事をし、行動力をもってまずは村の魅力を明らか

にし、村の再生に少しでも協力できればと思っています。

黄泉の国へ

旅立たれた小島兄

村外会員 吉田真一

昨年十二月の中旬頃に、小島兄から「八日に手術を終え退院し、もう普通の生活をしていい云々」というお葉書を頂き、私は安堵し、返事を差し上げました。しかしその後、小島兄が急逝されたという訃報を受けまして、本当に驚きました。それで結局、私からの手紙は、小島兄にお読み頂けなかったようです。

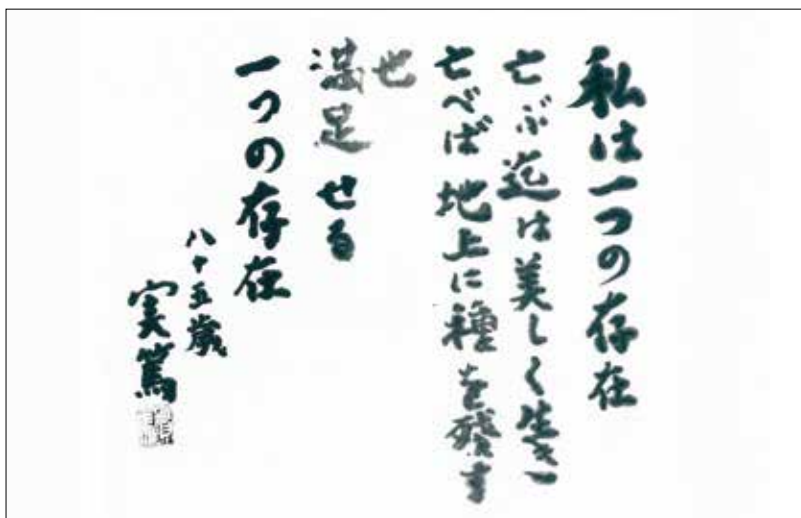
小島兄は傘寿というご高齢ながら、村内の長期滞在者として、新しき村の再建のために、身を賭して奮闘され、懸命に努力され、額に汗してお働きにな

られたと思います。

ですから、体力を相当消耗されて、志半ばにしてお倒れになりました。まだまだ活躍して頂きたかったと思い、大変残念です。ご本人もさぞや無念だと感じているんじゃないでしょうか。

小島兄は私とは対照的な方で、社交的で、多弁で、精神的にもかなり強い方だったと思います。毛呂山町議会選挙に何度か立候補され、そのたびに落選しましたが、決してめげない方でした。

改めまして、小島真樹兄のご冥福を、心からお祈り申し上げます次第です。



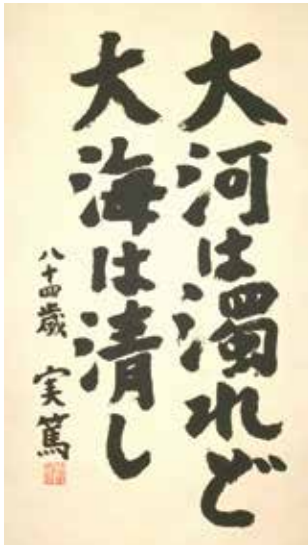
「私是一个的存在」（武者小路実篤記念館図録より）

調布市武者小路実篤記念館からのお知らせ

◆企画展◆

「書が映す 武者小路実篤」

「書よさはじかにくるもので、それを書いた人間の味が出るもので、書いた本人も知らないその人の精神力そのものがあらわれている所が面白い」（「私の美術遍歴」より）と語る武者小路実篤は、自らの言葉を書や画讀として数多く揮毫しました。また、実篤が蒐



84歳の書
武者小路実篤「大河は濁れど」
1969年 紙本墨書

集した愛蔵品には、良寛、慈雲といった僧侶による墨蹟のほか、龍門二十品、雲峰山磨崖刻碑などの拓本、近代では副島蒼海（種臣）や、志賀直哉ほか文学者など、多岐にわたる書があります。そのほか、作品に捺される実篤の印にも注目。齊白石のほか、山田正平、小林斗盦、石井雙石など昭和を代表する篆刻家に依頼した印も特集します。

実篤自身は書をかくことに何を思い、托したのか。「書」に映し出された実篤を展望し、また実篤が愛蔵した書も併せて紹介します。

実篤の「書」を追う

実篤は画讀や書などの作品としてはもちろん、原稿や書簡など、筆と墨で書いた様々な「書」を残しています。三十代までは、文章や言葉を伝える手段としての意識が強く出ています。書画をかき始め



作中で書家・泰山が語る書への姿勢
武者小路実篤 小説「涙」原稿
昭和 36(1961)年 3月

た四十代頃からは、作品として見せる書風へと変化していききました。本展では、実篤の「書」を年代別に追い、実篤の「書くこと」への意識の変容を探ります。

実篤が愛蔵した書や書画道具を特集



実篤愛用の書画道具
「澄泥硯（穴の空いた硯）」

実篤の琴線に触れた愛蔵の書や愛用の書画道具と、それらについて書いた評論をあわせて展示します。自分がいいと思ったものは、偽物かもしれないと言われてもかまわず手に入れて楽しんだ、実篤流の「書」の見方・愛し方を紹介します。

実篤を愛した書家

実篤の書は、「稚拙」と評されることが多く、その魅力は見過ぎされがちです。しかしその一方で、実篤の書画に取り組む真剣な姿勢や書に対する考え方は、多くの書家を魅了しました。小池邦夫氏は「自分の原点は実篤」と語り、「絵手紙」の普及を通して実篤の

表現に対する姿勢を広め、NHK大河ドラマ「光る君へ」の題字を揮毫した根本知氏は実篤作品を愛好し、著書で取り上げています。本展では、実篤を愛し、自らの制作や思想に影響を受けた書家や評論家を紹介します。

■会期

一月二十日（土）～二月二十五日（日）

午前九時～午後五時

*月曜（祝日の場合は直後の平日）休館

■入場料

大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

■展示解説

解説・石井 彩由美（当館学芸員）

日時・一月二六日（金）、二月二四日（土）

午後一時三十分から四五分間程度

会場・実篤記念館（展示室）

*要入場料。参加希望の方は当日、直接会場へ

関連講座

武者小路実篤と書

―筆にこもる美しさ―

■ 講師…根本 知氏（書道家・書道学博士）

■ 日時…二月一八日（日）午後一時三十分～三時

■ 定員…二六名

■ 会場…仙川ふれあいの家

（京王線仙川駅徒歩四分 せんがわ劇場三階）

■ 参加費…一〇〇円

■ 申込み…往復はがきの往信面に、講座名・応募者全

員（一枚につき二名まで）の氏名（ふりが

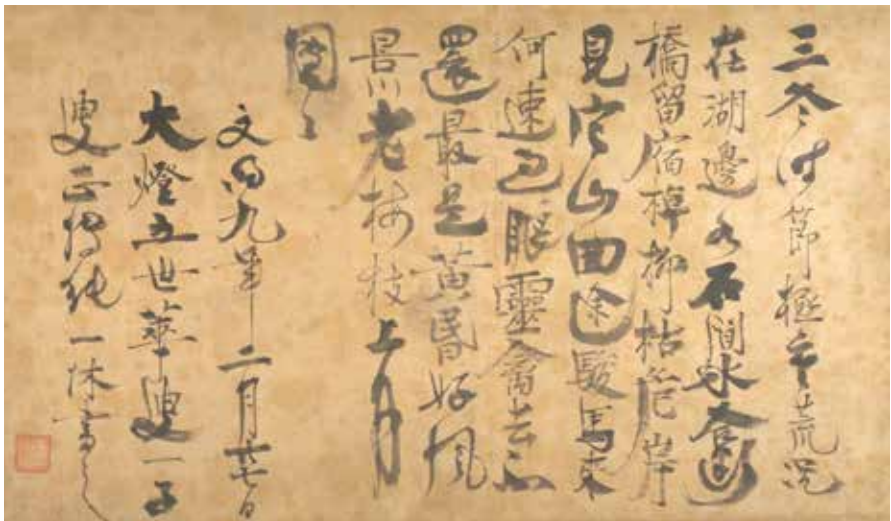
な）・年齢（任意）・郵便番号・住所・電話

番号を、返信面にご自身の宛先を明記し実

篤記念館まで

二月四日（日）必着

*応募者多数の場合は抽選



一休宗純 墨蹟「三冬時節」
室町時代 紙本墨書 武者小路実篤愛蔵品

「美術雑感」

―実篤に影響を与えたもの―

実篤は若い頃から美術に強い関心を持ち、生涯を通じて美術に関する評論を発表しました。その情熱は深く、白樺同人時代には美術館設立を呼びかけ、四十歳ごろからは自ら絵筆をとり、本格的に画を描き始めます。五一歳の時には、西洋美術の実物を見るために欧米各地を旅行します。時には美術品から影響を受けて、



白隠「鍾馗図」
年不明
紙本墨画

自身の文学作品や書画の制作に反映させています。

本展では、実篤記念館が収蔵する実篤コレクションを紹介いたします。実篤は愛蔵していた美術品から何を感じ取ったのでしょうか。彼の作品や評論の引用を交えながら探っていきます。

■会期

三月二日(土)～四月一日(日)

午前九時～午後五時

*月曜日(祝日の場合は直後の平日) 休館

■入場料

大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

■展示解説

解説・勝見 知世(当館学芸員)

日時・三月一五日(金)

午後一時三〇分から四五分間程度

会場・実篤記念館(展示室)

*要入場料。参加希望の方は当日、直接会場へ

展示作品



伝雪舟「雷図」
室町時代 紙本墨画淡彩 武者小路実篤愛蔵品



武者小路実篤「南瓜と壺」
1972年 油彩・キャンバス

◆ これからの催し

観梅のつどい

出演：桐朋学園大学音楽学部学生・卒業生

日時：二月二三日（金・祝）

午後一時から四十分程度

コンサート終了後ギャラリートークを行います。

会場：実篤記念館

*要入場料。参加希望の方は当日、直接会場へ
定員：なし。ただし、椅子席は先着三〇名ほど

◆ ミュージアムショップ

実篤チョコ販売中

毎年好評のうちに完売を重ねている武者小路実篤記念館のバレンタインシーズン限定チョココレートを販売中です。

洋菓子メーカー・モロゾフの缶入りアソートチョココレートで、毎年異なるオリジナルパッケージをお

楽しみいただいています。

缶は二〇二四年限定デザイン。金色の角缶に実篤の色紙〈チューリップ「美愛真」をあしらいました。優しいピンクの花味のチューリップの花に、実篤の言葉「美愛真」が添えられています。

一月二十日（土）より、実篤記念館窓口・オンラインショップ『BASE』ほかにて販売しています。

価格：税込六五〇円

*オンラインショップは価格が異なります。
販売数：五〇〇〇個限定（数に達し次第販売終了）

*販売場所その他詳細は、実篤記念館ホームページをご覧ください。または直接実篤記念館へお問い合わせください。



実篤の色紙〈チューリップ「美愛真」〉をあしらったバレンタイン限定チョコ

調布市武者小路実篤記念館利用案内

・ 開館時間／午前九時～午後五時

(閲覧室は午前10時～午後四時)

・ 入場料／大人200円 小・中学生100円

※ 展示替え期間は半額

※ 調布市内在住六五歳以上は無料

※ 身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・愛の手帳
をお持ちの方、及び付添人は無料

※ 調布市在住・在学の小・中学生は、毎週土曜日に無料
パスが利用可

※ 「東京・ミュージアム ぐるっとバス」利用可

・ 休館日／月曜日 (祝日の場合は直後の平日)、

一二月二九日～一月三日

※ 展示室と閲覧室は別途休室日あり

・ 交通／京王線つじヶ丘駅または仙川駅下車 徒歩10分

小田急線成城学園前駅より「調布駅」または「つ

つじヶ丘駅南口」行きバス稲荷前下車 徒歩五分

・ 駐車場／乗用車五台

調布市武者小路実篤記念館

〒182-0003

東京都調布市若葉町1-18-30

電話・03-3333-2610・6448

ホームページ： <https://www.mushakoji.org>



新しき村創立から

第二十六年（埼玉の東の村の開設四年目）

一九四三年（昭和十八年）

（財団法人新しき村発行の「新しき村五十年」から転載）

新しき村が地上に生れてこの十一月十四日で満二十五歳になる。

まだ若すぎるが

いくらか大人になって来たようだ

いくらか力が出来て来たようだ

之から皆で働き出せそうだ

いろいろの方面に

兄弟姉妹が働きたしそうだ

自分は当時三十三で

今年五十八になる

兄弟姉妹と愛し愛され

ここに楽しい満二十五年の村の祭りを迎える

その間にいろいろのことはあったが

しかし我等は一年一年

生長して来たことはたしかだ

生長は遅すぎたかも知れない

それだけに大木になって見せるつもりだ

我等はますます希望をもって前進するのだ

目的に向って、あらゆる道を通って

何処までも我等は前進するものだ

新しき村万歳、諸兄弟万歳（武者小路実篤）

○水田三反六畝を加えて、五反二畝となる。

○三月、小松慎一、二十日程手伝う。

○五月四日。水田の苗代は水面わづかに短冊をあらわしている。芽ほしだ。燻炭をふりまいて黒い短冊の上にあざやかな黄緑の芽が四分ほどのびている。芽ほしも終りにしてよい。一昨日は八十八夜で貯水池の水が放たれてこのように豊かに水がえられたのだが、再びとざされてしまった。雨のふらない今年は、これでは今年こそ大へんな水不足になりそうだという故老もあ

る。毛呂本郷の方では八十八夜にたねまきだが、東の村の方ではたねまき後大体十五日位たっている。

苗代の水は昼はほして太陽の光りと温度をうけることをつとめ、別に温めてある水を夕方から入れて温度のさがるのをふせぐのだが、今年のように水の不足な場合は水をほしすぎると入れることができなくなる。で、少しほして少し入れるということになる。しかし、芽ぼしはこれまで充分にしたし、今の所苗代の出来は美しい。今年はよく出来そうだと思う。三月、小松慎一君が二十日ほど秋田県から出て来て手伝ってくれた



東の村の風景

時、水田の荒おこ

しが出来た。その後、野村君など主にやってくれて土くれを細粉した。もう一度それをうちおこして水を入れ、くろをぬり、しろかきをするところまでには苗も育つ

て田植が出来るようになる。

今の僕達は苗代の苗の育つのを見とりながら、陸稲のたねまきをしているのだが、畑をかこむ青葉若葉の新鮮な若々しさ、やはらかさに感嘆することが多い。畑に縄を張ってうねを切り、肥料をし、たねをまき、土をかけて最後にふみかためておく。そうして出来る畑のうねの形は美しい。気候も寒くなく暑すぎもせず、少し汗ばむ程度で時々よい風が吹いて来る。土をふむ裸足のあし裏の熱いこともあるが、それもいやではない。かえって僕らは土を愛しているのだと考えるきっかけになる。

夕日の美しい夕方になり、仕事もひと区切りすんで農具をかたづけける頃になると、さすがにほっとする。四十分程かかる帰宅の道を歩む時分には、体もくつろいで肩のあたりの骨が軟らかになったように感ずる。頭もぼうつとなつて何のこだわりもなく、どんなことももう気にさわらなくなる。しかも音にきく物や見るもののすべてがやさしく美しくなつかしい。(略)

(川島伝吉『東の村にて』・昭和十八年六月号『馬鈴薯』)

○八月五日から十日間『東の村第一回夏期鍊成会』が開かれた。戦争中だから、そういう名になったが、いまの夏の『労働祭』の先祖だ。『四ヶ年ほど僕は此処で生活しているが、それは昼間だけで、夜の東の村ははじめてだ』という会だった。

○八月五日（第一日）

午後、雨がやんだので、荷車を毛呂本郷から村へゆく。きてみると、先生、金原君、太田、加瀬の諸兄がきていた。東京の方では、雨は降らなかったのか。野井が炊事小屋の木組をつくっていた。話をきくと、一人雨の中をきて、木組のことにとりかかっていると、十時半ごろ太田君が「やあ」と云って八高線の方から来、まもなくガソリンカーの方から加瀬君が来、十一時半のガソリンカーで先生と金原君が来た。太田君は弁当を持たずに米をもってきていたので、野井は一人で飯を炊き、焼き茄子をつくり、馬鈴薯を煮たりして先生にも食べてもらったとのことだ。「先生は馬鈴薯が好きではなかったのだがね」というと「歯がわるくて馬鈴薯ぐらいしか食べられないのだそうだ」と云つ

ていた。

僕は、筥、布巾、米、その他まだ集まり切らないでいた炊事道具と寝具など荷車へつんで村へきたのだが、そして途中もしきりに雨を気にしながら来たのだったが、これはおそかったという気がした。増田荘の窓から首を出された先生も、他の諸兄も嬉しそうだった。僕は汗でぐっしりになっており車をひいたほてりで頭はくらくらししていたが、こう皆が揃っているのを見ると元気が出た。諸兄の顔をそれぞれ見まわすとそれが挨拶で、時間も少ないので栗の木の下へ集まった人達へ「皆さんには遠い処をよく来て下さいました、これから鍊成会を始めます」ということにし、先生もニッコリされたので「まづ今日は炊事場の為の地ならしをあげることにませう」とそれにかかる。蛸がいるので火を焚いて蓬をいぶし、帽子をふりまわして濛々とその煙を散らしながらそれにかかった。

増田荘に泊ったのは加瀬君、金原君、川島の三人だった。先生は「追々人も出るだらう」そう云って帰えられた。(略)

○八月七日（土曜日）

朝五時、めざめると曇っていて雨になるかと思われた。しんしんとした気持ちでうがいをし、冷たい水で顔を洗う。野村君もおきてきて炊事にかかってくれた。朝の清純な心地のうちに日記を書きにかかっていると、控屋の方の須藤君がおき出し、その他の人々も順次床を出る。床と云つても、大てい毛布一枚程度のものだ。それでも感心に単衣のねまきを持ってきているものが多い。日記が終ると、僕は炊事場へ出て行った。朝飯は今朝は八時頃。食後はおかしいのだが、先生の胸像のある所へ集つて、皆で朝の挨拶を申しあげた。高さ四尺五寸ほどのスッキリと白いミカゲ石の石柱の上にそれがのつかっている。ひきしまった先生の横顔が美しいのを讃嘆しあつた。増田さんの寄贈にかかる立体写真というものなそうで彫刻家の作品というものではないが、かえつて嫌味がなく、しかも先生らしいものが見られることを喜んだ。その時分には朝空の曇りもどこかへ行つて太陽が現われ、少し蒸かげんの暑い日になりつつあつた。

そこで今日一日のプランを相談し、そこを離れるこ

とは各々なすべきことにおもむいたことだった。加瀬君は野村君と共に里芋の土よせ、昨日のつづきである。金原君は明八日の芝居の為の道具をつくる事など。須藤君と僕とは一緒になすべきことがあり、その前に雨が降りそうなので、薪を取り入れておいてもらうことになった。僕は葛貫へ肥桶をかりに行った。下駄三足も買った。

十時頃、野井がトマトと南瓜を運んできた。夕方までに杉皮屋根を葺きかけるまでになった。金原君は三つめの腰かけが出来た後、増田荘内へ舞台を作つてみた。午後は僕もそれに加勢して見物席をつくることにした。

此の日、坂井奈迦治君が新しく加わり、須藤君は夕方帰つて行つた。僕の此の日感じたことは毎日が特別日だということだった。

この日、東の村始まつて以来、最初の風呂がわいて、互にゆづりあいなながら夕の浴みをし、その心地のよさに驚いたのも格別だった。

○八月十三日（練成会九日目金曜日）

朝八時、先生の胸像の前に集つたのは須藤、寺田、

氷見、野井、野村、川島、境の七人だった。すがすがしい空がはれて、まだ暑くならない涼しさだった。

げんしゆくに敬礼する此の会期中の慣例は、僕には美しかった。そして今朝は集った人々が残らずかわるがわる演説して、明日を以て終るこの錬成会を美しく楽しかったと云い等しく感謝した。最後に今日の予定をうち合せた。それによれば、寺田氏は絵を描くこと、他の人々は道路をつくることだった。午前中の三時間ほどそれにかかった。それだけの作業でかなり立派な仕事ができた。それから僕は子供を見に毛呂の方へ出かけたが、十一時半のガソリンカーで先生が見えられ、須藤・寺田の両兄が入り替りに帰ってゆき、夕方には新しく太田君が見えた。先生はこの会期中、これで三回来て下さったことであり、太田君は二回目だった。夜は例によって増田荘の会がひらかれたのだが、今夜は先生のお話をきくことができ、「七福神」の終りの方を朗読して下さった。僕等もそれぞれに話したり詩の朗読をするなど、興がつきなかつた。月がよくてそれから大いに刺激された。(略)

○八月十四日(最終)

まだ五時前と思われた。皆まだ眠っている。音をたてないように増田荘をぬけ出すと、手水をつかい、栗の木の下の食卓へ行つて日記を書きにかかった。冷え冷えとして静かな朝だ。先生もまだ眠つておられるのであろうか。日記を書き終つて炊事にとりかかろうと、井戸のポンプに手をかけると同時に控屋のガラス戸があいて、先生が現われ、縁側の所の下駄が裏がえつていたのであろうか、いそいでそれをなおす為に手をおぼされた。その動作が機敏で形も美しく、今迄眠つて居られた方とは見えなかつた。ずっと前からめざめておられたに違いないように思えた。まもなく陸軍軍医大尉太田幸之助君も起き出てきたが、これは如何にも軍人らしくそのままずっと林の奥へ歩み入つて三十分以上も出て来なかつた。かなり遠くまで散歩したらしい。

この朝の栗の木の食卓に



増田荘

は先生も座られた。そして金原君の製作になる異国的な腰かけを「これは座れるね」と撫でられた。

この日は先生の胸像の前の参集は省略された。北京には天壇という大建築があり、支那の皇帝が天を礼拝した処ときくが、その礼拝は同時に天文の観測でもあったかも知れない。新しき村にも何かそう云ったようなものがあったて、先生にひきいられて或いは天を拝し、或いはそういう処で煮つまつた先生のお話をきくこともできたら素晴らしいことであろう。そんなことを僕は考える。そういうことのかわりに、先生の絵を描かれる処など僕らは感心して拝見した。なすびや茸など次々と描かれた。

太田君は慶応病院で今日輸血する患者をみなければならなくて、八時八分毛呂発の汽車で帰えることになった。ついでに毛呂本郷でねている僕の子どもを診てもらうことができた。六七日ねていればよかろうとのことだった。村へ帰えってみると野村が疲れ切つてねていた。先生などからすすめられて寝たのであろう。彼の眠りの深き幸いを思うことができた。

先生はまた絵を描きにかかられた。野井が何処から

か十房ほどの葡萄をさがしてきた。今年始めて出来たものだった。先生はそれをつまんで食べられたが、絵には描かれなかった。僕等も一つ二つつまんで食べた。さすがに新鮮でめづらしかった。

十二時頃江馬が来た。しっかりした身支度でいかにも働きたそうだった。一緒に長谷川君という写真学校をまもなく卒業するという若い人がきて、先生を主にいろいろうつつしたようだった。栗の木の下の食卓での昼食の光景もうつされたかと思う。

昼食後、江馬は何等か働かせてくれという。その望みを叶えてあげられないのは残念に思ったが、今日はいから終了式をして予定を終ることにしたのだと話して、了解してもった。終了式にあたり、氷見は十数篇のできた詩をよんだ。

秋口とは云え、未だ暑く輝やく空にひるがえつていた日章旗及び村旗がおろされたのは二時頃だった。二時四十五分に長瀬をたつて、帰つてゆかれる先生その他の一行を見送る途中田圃のほとりに咲いている百合に似た花を「あれは何か」と先生が問われ「かや草或いはくわんぞうと云います」そう僕は答えたが「この

花には八重とひとえがあつて、これはひとえの方だが、共にかや草、くわん草というものです」と云いそえなければならぬことは怠つた。しかし、後で本を見ると僕はまた新しいことを知らなければならなかつた。それによると、八重のは「やぶくわんぞう」と云い、ひとえのは「のくわんぞう」というらしかつた。夏から秋口にかけて山野の叢に咲き誇る火焰にも似た色をした暑さの花だ。

(川島伝吉『東の村第一回夏期錬成会日記』・

昭和十八年十月号『馬鈴薯』)

○そよ風

お前は親切だね

一番怠け者の僕にも

お小言一つ言わず

優しい慰めを送ってくれる

「御苦労さん」

お前にそう言われると

僕は又勇気が出る

僕は馴れない手に

道作りの鍬を握るのだ

○つりランプの下に

先生を囲んで

七人の兄弟が坐つて

各々感想をしゃべっている

その中に一人

そつと泣いている男がある

自分のようなものが

自分のようなものが

その男はそう思っているのである

もう二十何年

新しき村の御厄介になつて来た男だ

○明るいうランプの下で

楽しい夕飯がはじまる

丸木で造つた食卓の上は

友情でいっぱい

うれしくてのどが通らぬどころか

私は食べ過ぎて恥かしい程だ

(氷見七郎『東の村の夏の会で作つた詩』・

昭和十八年十月号『馬鈴薯』)

○八月、劇団『五穀座』誕生。東の村増田荘で、モリエール『亭主学校』初公演。

○『詩の会』誕生。八月二十一日、井の頭文化園講堂で朗読会ひらく。

○村の絵はがきができた。(村近く、村へ行く道、旗の下にて、増田荘、汽車の煙、白い壁、収穫、稲と武者小路実篤の八枚)

○新しき村美術展を菊屋画廊で開く。

八月八日(立秋)

(略) 八時に朝の御飯、ゆっくりとそれをすますと、此の日も先生の像の所へ集って先生へ朝の御挨拶をし、それからこの日のことを相談した。まづ畑の除草を皆ですることだったが金原君は坂戸まで芝居の人達を迎えに行つた。十時頃到着した『五穀座』の人達は二十人もあるかと思われた。丁度朝の雨もよいの空もからりとはれて、青い田圃の中のでせ道を長い行列をして、田の草とりにさしかかって来た人々を見ると、さすがに芝居をやるうとする人達だけであつて、鈍骨ではなく、華やかな姿も顔も歩きぶりまでそれらしい

人達だつた。

東の村の増田荘という建物は舞台にも使えるようにと先生が案を出されたものを野井が大工を指図してつくらせたものだ。間口が三間半ほどあり、高さ九尺ほどの六枚の扉は三枚ずつのびようぶのように左右にひらくことができるのだつた。今度始めてこういうことに使われるわけだ。モリエールの『亭主学校』というのが今日の芝居の一つだつた。長与さんがいつかモリエールをほめて「モーツァルトのようだ」と云われたことがあつた。感じのあるお話としてきいたものだつた。二十一才の後藤真行君というのが総大将でよくやっていた。揃つて素質のよい人達が集まっているらしいことに感心した。その演じ方ものびのびと楽しんで、品よくきれいだつた。男役も女役もそれぞれに面白く美しくそれらの織りなす綾を面白く見ることができた。或る人は評して「男優達はしっかりしている」という「女優達は果敢にやっていた」と云つた。他に『虐げられし人々』の或る場面の朗読、子どもの見物人に対する氷見の面白いお話などあり、最後に先生から見物に集まってくれた老人や子供達、田の草とりの田圃

から蛙のように這い出してきた泥だらけの人達に対して、東の村始まって以来の最初の公けな挨拶をされた。後に、先生はあのような人達をこそ心から喜ばせてあげたいと洩らされた。先生という人はそういう方なのである。

午後四時四十五分のガソリンカーでひきあげてゆく人々を武州長瀬駅まで見送る道々にも、かんたんな舞台を少しもやりにくがらずに、衣裳はさまざまにあわせもの、メーキアップも要領だけ、というやり方であれだけ美しくできたのはあっぱれなものだと、そんな話をつきることなく話しながら、山道などこえてゆくのは楽しかった。五日からずっときていた加瀬君と、昨夜からの坂井君もこれらの人達と共に今日は帰ってゆくのだったが、金原君は加瀬と同じく最初の日からきているのだが、芝居の方のあとかたづけの用事があるのもう一晚泊ることになっていた。山道で今日新たに参加してきた大州君に行きあったが、芝居の人達以外に今日来てくれて今日帰ってゆく人々のうちに先生、前田伍作、氷見七郎その他の男女の人達があった。武州長瀬駅へゆきついても時間がまだあって、

いろいろ話がつづいたが、ガソリンカーが来て皆が帰ってゆくのを見送ってしまうと、取り残されたような感じが少しした。しかし東の村へ帰って夕食の支度にかかり、ランプを吊り下げた栗の木の下食卓での食事にかかる頃は、再び新しい楽しみが始まっていた。七日位の月も強い光りを放って、美しさを増してきていた。

(川島伝吉『東の村第一回夏期錬成会日記』)

昭和十八年十月号『馬鈴薯』

○これはこれは皆々様、まだお暑いのに、ようこそお集りなされました。

今日は定めしよい詩が聞けるだろうと、私めは先程より、胸がぞくぞく致しております。

『馬鈴薯』はよい雑誌ではございますが、私共精神の過剰者にとりましては、いささか頁が薄すぎまする。

書いたものが思うように出せないとは、何としても残念でござりまする。

私共の仲間には詩を一万書いた方もあるそうで、私

めもそれには及びませんが、それでも二十や三十は出来まする。

『言いたいこと言わぬは腹ふくる業なり』とか昔の詩人も申しました。

それでまた少しはお暑うござりますが、この初秋の空の下この会を催したのではござりまする。

どうか皆様、ふしも高々と心の限りをお歌い下さりませ。

十篇でも二十篇でも、時間の来る迄お読み下さりませ。

私共は正直者でござりまする。

いい詩には感激の拍手を送りましょうし、悪い詩にはいねむりでお答え申しませう。

西洋の偉い詩人が申しました。『物語はどんなに不思議でも、詩人の腕はそれを真実にする』と。

さらば皆様、真実の歌をおきかせ下さりませ、と開会の御挨拶を申し上げる者の名は、村の詩人氷見の七郎。

〔詩の朗読会〕の開会の辞 昭和十八年十一月号『馬鈴薯』

○十一月十四日は、新しき村満二十五年の記念日。神田教育会館で、午前は記念講演会、午後は会員大会
○十一月二十一日、東の村でもお祭り。

○十一月十四日、村の二十五年を記念する為めに、午前に演説会、午後には村の大会を、神田の教育会館で開いた。

演説会には、氷見、川島、野井、先生の四人が喋った。村の大会は、根津の『村の精神』朗読から始まり、新しい会員約二十人の紹介があり、皆拍手で迎え、小国、前田、高橋、須藤、根津、利倉等が割と長く喋り、立て挨拶だけした兄弟は多勢いた。帰還した太田、渡辺もにこにこ笑って立った。遠く秋田からこの日の為に来た小川君がいたりし、約百名位は集ったと思う。先生は御自分の詩を朗読された。僕は百度もきいているが、この日は又よかったと思った。外のものもそう言っていたから、聞かなかった人は残念なことと思う。余興には、利倉構成のシュプレヒコールから始まり、先生作の『呑気な親子』と『新浦島の夢』二つが上演された。五穀座の諸君が主になってやり、照明、装置、

扮装等まるでない中で割とよくやってくれた。『呑気な親子』の父と娘の処は感じが或るところまで出てよかった。井田君、小宮山嬢はなかなか役者である。『新浦島の夢』は実に大した作であり、村にとっても大事な作である。先生が村を始めた翌年に書かれたもので、先生がどういう考えで村を始められたか、又どんなに生々と強く村のような世界を望まれ、確信を持って書かれたか、この一作を見ればよくわかるのだ。一時間余にわたる長い間、皆しんとしてみた。こういう芝居をよく見ているというのは村の会員である。橋本兄等の努力は多としたい。村は二十五年経ち、この作が書かれた頃生れていない兄弟が見物の中に多勢いるのだから面白いと思った。

最後に丁度来て下さった長与さんに話をして戴いた。大東亜戦争についてお考えを実にみっちり、しみりと話して下さった。実に深い話で、皆強い感銘を受けた。立派な話でそんなに聞ける話ではない。実に有難いと思った。速記にとっておかなかつたのを残念に思った。

尚この日の為に山本願弥太氏から、又その後も方々

の兄弟から祝いの文章を送って貰った。発表洩れの分は木曜会で発表するつもり。

かくして午前十時開会して、午後五時までぶつ通しで愉快に送った。

尚、この日の先生の演説は、その中『馬鈴薯』にのせられることと思う。

僕はこの日の係りを受持ったがこうしたらよかつたと思うことはいくつもあつた。大抵後からの考えで残念でならなかつた。行届かなかつた様々の点お詫びします。

(江馬崇『雑感雑記』・昭和十八年十二月号『馬鈴薯』)

○新しき村の記念日のことは、江馬君の記事に出ているが、十一月二十一日には、東の村でも続けられた。当日はさすが大きい増田荘も満員になった。村の兄弟の心尽しで赤の御飯が出たり、余興には「仏陀と孫悟空」と「楠木正成」の朗読があつた。先生が正成で、正季をやった野井が泣く処を本当に泣いてしまった程本当の感じが出た。こういう楽しい催しも村が更に前進すること、大きな意味があると思う。

（前田伍作『編集後記』・昭和十八年十二月号『馬鈴薯』）

○倉田百三逝去。『馬鈴薯』四月号に追悼特集をする。

武者小路、長与、千家、川島、氷見、武田、根津等執筆。

○増田増藏逝去。『馬鈴薯』九月号に追悼特集をする。

武者小路、前田、野井、川島等執筆。

○一月『馬鈴薯』二宮尊徳号を出す。

○倉田君とは誰よりも早く知り合った。其頃倉田は福岡にいて、もうその時分から病気で療養していた。倉田は「出家とその弟子」を僕等の雑誌「生命の川」へおくつて来た。その前に感想を送って来て、手紙をもらったと思う。「出家とその弟子」を一番初めに読んだのは僕なのだ。第一幕だけ送って来た。僕は非常に感動したので、あとをかく事をすすめる手紙を書いた。丁度その日、武者さんが来たのでお見せした。武者さんも一寸読んで割に厚意ある言葉だったので、自分も悦んだ。それから毎号、最後の幕まで送って来た。半ぺらの原稿紙に筆で叮嚀に書いたもので、原稿のきれいなものにも感心した。それもつい紛失してしまったのは残念だ。倉田君はそれから盛んに手紙をくれたが、

倉田君一流の感想も多かった。写真も送ってくれた。西田天香氏を倉田は信頼していて、天香氏を賞め天香氏はこんな手紙を書くと言って内容と字を賞めて同封して来たりした。

倉田君の噂はよくきいた。一高時代は演説なんかやって学校の秀才だったと。自分は仲間に倉田のような誌的力量的豊かな素質のいい人が入ったのを喜び、皆んなも悦んだ。ただその頃は皆んな原稿は自費で負担して出し合つて雑誌を維持していたので、倉田君等は毎月百円近くの印刷費を送って貰わなければならなかった。それが倉田君に気の毒がっていた。その「生命の川」は、後に杉原善之助と八幡が編輯していた。犬養も入り、近藤経一君も入り、いい雑誌だった。その頃の事は懐しい。倉田君が力作を毎月つづけてくれたのだが、その頃はまだ「生命の川」は世間的にも文壇的にも何ら影響がない存在だった。岩波からそれが出版されると、忽ち激賞され読者が激増し、非常な版を重ねたのである。

倉田君についてはいろいろ書きたい事が多いが、忘れもしたし又の機会にゆずる。

「生命の川」の後、古屋芳雄と倉田君と僕で「芸術」という雑誌もやった。それにも倉田は脚本をのせた。「白樺」に「俊寛」をかき「生長する星の群」にも脚本をかき、脚本作家としての力量を発揮した。

調子の高い興味のもち方の高い、真剣な詩的想像力も豊富な熱情に富んだ人だったが、思想家として人生の苦悩者としても、倉田君は稀に見る人だった。

倉田君は病痾と闘い、人生の苦悩者として実に精神的にも肉体的にも、並みならぬ苦しんだ人だった。

（千家元麿『倉田兄の死』・昭和十八年四月号『馬鈴薯』）

○増田増蔵さんがなくなった事を、村の例会で川崎支部の根津君から聞いたときは、あまりに思いがけないことで驚くと同時にがっかりした。根津君は神奈川版に出ていたので知ったのである。増田さんは、東の村に増田荘を寄附した人で、増田荘には増田さんの立体写真が置いてある、八十一歳だから歳の方から言えば、目出度いとも言える歳だが、僕達は増田さんのいつも若々しい元気さに感心していたから、九十位までは当然生きると言うように思っていた。

いつも村に元気な手紙をよこし、いろいろ村をよくする事を考えていてくれ、増田荘以外にもいろいろ寄附してくれ、仕事を助けてくれた。又「馬鈴薯」の二宮尊徳号の為には、村の若い兄弟がたじろぐ程、手紙や電報でいろいろの考えを書いて来てくれた。そして二宮尊徳号が出来た時、一番喜んでくれたのも増田さんだった。そう言う時の純情が、どうしても僕より二十何歳上の人とは思えない若々しさで、どうかすると自分の方が歳上でないかと錯覚を起したくなる程だった。僕にもいつも養生に就て親切に注意して下さった。

僕が始めて増田さんにお会いした時は、増田さんが七十になるかならないかの時で、僕が「改造」に二宮尊徳のことをかいたのを愛読され、元々二宮尊徳崇拜だった増田さんは早速僕に手紙を書いて下さった。それから何度か文通したあと、佐々井さんを僕に紹介する意味もあり、僕は増田さんに呼ばれて東京駅ホテルに出かけ、其処で始めてお逢いした。僕は愛読者から時々手紙をもらうが、二十歳以上の人から熱心な手紙をもらったのは増田さん一人と言っている。それから

僕が病氣したことを雑誌にかいたりすると、すぐ手紙をよこされいろいろ注意して下さったり、村の土地に就ていろいろ考えて下さったり、親身のものでとても出来ない、僕などは真似も出来ない程気がつき、親切に僕のこと、僕の仕事のこと、殊に新しき村の仕事のことには、心をつかつて、いろいろ助力を惜まらずにして下さった。

そのことに就て一々かくのはわずらわしい程で、僕も大半忘れてしまった。しかしその無私な親切な心だけはいつも忘れず、黙ってはいたが、いつもいい感じを持ち、珍しい人だと思つて尊敬していた。

今、新しき村がやっと發展し出して来た時、その結果を十分お見せ出来ない内に、なくなられたことも残念である。

しかし二宮尊徳号を大変喜んで下つて、之で死んでもいいと言うようなことまで川島からの手紙に書いてあったことを聞いたが、それ迄喜んで戴けるものとはどうしても思えなかったが、しかし非常に喜んで下さったのは事実なので、よかつたと思つている。今後いろいろ喜んで戴ける催しをするつもりでいただけ、

なお残念である。

自分は個人的なことで母が生きていたら、さぞ喜んでくれるだろうと思つたと母が死んだことをその度残念に思う。今後新しき村で何か増田さんを喜ばすような事が出来た時、増田老人のことを僕達は思い出し残念に思うことと思う。

増田さんが新しき村に尽されたことは、増田さんの一生の仕事にとつては、一つの枝に過ぎないと思つが、その一つの枝が中々美しいのに僕達は感心もし感謝もするのである。その他の仕事に就ては他の人が他の所でかくと思う。ここでは自分は新しき村の一会員として、新しき村に尽された増田さんの誠意に感謝するとどめる。

惜しい方をなくしたものと思う。

(武者小路実篤『増田さんの事』・昭和十八年九月『馬鈴薯』)

※写真は、「平成二十年度秋の特別展・新しき村九十年―人間らしく生きる―」(調布市武者小路実篤記念館／発行)

会員だより

■ 新会員

大島 光雄 埼玉県川口市
板倉 弘明 東京都江東区

■ 会費受領(数字は西暦二〇〇年〇月)

大島 光雄	23 10 24 9	大塚 三智夫	23 11 24 10
田原 千	23 11 24 10	板倉 弘明	23 11 24 10
佐々木 百谷也	23 11 27 2	宿谷 睦夫	23 12 24 11
和田 東市	24 1 24 12	野村多満子	24 1 24 12
阿部 信子	24 1 24 12	貝瀬 鉄雄	24 1 24 12
岸田 克彦	24 1 25 8	綾部 有子	24 2 25 1
山口 きん	24 3 25 2	矢幡多美子	24 3 25 2
重松サチエ	24 7 26 2	穴戸 寛之	24 9 25 8
穴戸 初枝	24 9 25 8	山田 順子	24 9 25 8
山田 政一	24 9 26 4	松島 昇	25 1 25 12
好田多兄子	31 3 33 10	牧 武士	34 3 35 2

■ 「新しき村」購読料

四名 26.6

■ 寄付

高橋ひさ子 遺産 33,837
千賀修一 1,800

弁護士法人 T L E O 虎ノ門法律経済事務所 500

株式会社虎ノ門法曹ビル 500

弁護士法人 T L E O ホールディングス 500

株式会社 T L E O 500

川野今朝治 30

株式会社あさひテクノメンテ 75

■ 雑誌などの為の会

阿部信子 1

穴戸寛之・穴戸初枝 1

(単位:千円) / 2023年10月31日 ~ 2023年12月31日



【茶】新年あけましておめでとうございませう。一月一日能登半島が地震に襲われた。十九日まで二百三十二人の

死者、避難者二万人を上回る方々が伝えられている。お見舞と回復を祈るばかりです。暑かった昨年の記録的猛暑、一月十三日には雪がちらついたが長くは降らなかった。十月十一月も例年に比べて高温が続いた。寒波もゆつくりとやってきた。その分茶作業も出来た。森山さんにはいいねいに刈払いをやっていた。除草後の落葉しきを今行っている。川辺兄、山田政一兄、山田修一兄、松島兄等にお手伝いいただいた。

十二月二十二日に小島真樹兄が亡くなられた。あまりに急の事で。おーいといつも声をかけてくれる、彼のさわやかな元気が伝わってくる。旗ふり役

号令係を失った。何とも淋しい。新村堂（神保町）のつながりをとでも大切にしていた。竹の子掘、竹炭は小島兄ぬきに考えられない。雑誌「新しき村」編集のお仕事の他に「草」を発行されている。これからこそと兄の無念を思う。小島兄ありがとう。

（和田東市）

【田園】令和五年度の水稲作は、僕がここで田んぼに携わるようになった平成十二年以降で一番の猛暑と水不足だったように思う。ある夏の日の早朝、水が来ない水路の上流のほうへ様子を見に行き、腰の高さほどまで雑草の繁ったよその土地のなかを走っていたら、太ももくらい奥の深さのコンクリートの水路に落ちて脚を強打した。打撲というのは当日よりも翌日、翌々日のほうが痛くなるようで、足を着くのがやっというくらい痛さになった。病院に行った方がいいよと稲垣さんに言わ

れたけれど、激痛の一日を乗り越えたとだんだんに楽になってきたので、自然治癒させた。積算日照時間が例年よりも早くたまったので、イネの生育も早かった。出穂前に田んぼを乾かすには好都合だったが、出穂してからも水不足は続いた。新潟の例がニュースで取り上げられていたが、ここでも米の質は少し悪くなった。収量の面で言うと、冷夏よりも猛暑で水不足のほうが良い。そういう天候だったので、いつもジメジメと乾かない田んぼも比較的によく乾き、手刈りをする面積は例年よりも少なくて、コンバインの稲刈りもし易かった。コンバインを使った稲刈りは、九月二十九日から始まり、十月二、三、六、七、十三、十九、そして二十六日に終了した。コンバインは稲刈り前の試運転時に、ちよつとした異音が気になり、川島農機さんに診てもらうと、故障が見つかって部品交換修理してもらった。稼働中、他に大き

なトラブルが起きることもなく終わることができた。新伸町と呼ばれる約五畝ずつの四枚の田んぼは、水を入れられなかった影響で、ヒエ畑のようになってしまい、一番以外の三枚は、その中でも実っているイネを手刈りして縛って天日に干した。鴻ノ巣という糯米を植えた三枚の田んぼは、過去一イノシシの被害が大きかった。ゴロゴロと寝転んで体を擦り付けているのだろう。もう拾えないくらいにイネがあちらこちら倒れてしまっていた。

十一月に入ると、色々な片付け、柚子取り、最後の草刈りあちこち、天日干し米と種籾の脱穀など。二十三日、二十四日と、トラクターにバケツを取り付けて、その中に僕がのこぎりを持って乗り、倉敷さんは運転席でバケツの上げ下げの操作をし、低く垂れ下がってきている桧と杉の木の、枝払いをした。場所は、寺さんと美穂さんが仕事をなさっていたかつてのシイタケ

ロードだ。その林の中の下草刈りもしておいた。イノシシが何度か現れた場所なので、見通しよく、すっきりとさせたかったのだ。また、稲垣さんと倉敷さんは、上で切り落とした枝葉を軽トラに積んで、田圃小屋脇の燃やし場へ運んだ。相当な量になった。十四日、僕と稲垣さんと彼の友達で、蝮姑（おけら）の飼育、研究者の林弥生子さんと、半日柚子取りをした。林さんは、夏にも何度か田んぼの手伝いに稲垣さんと一緒に来て下さった。お昼を取った後、村の中、稲垣さんと歩いて自然調査をなさっています。

十二月に入るといよいよ餅つききの為の準備だ。今は年間ほとんど厨房を使っていないので、汚れが溜まっている。その掃除から、道具の準備、建物周りの清掃、舞台回りの清掃、これらはほとんど倉敷さんにお任せして進めてもらった。僕は、この厨房が出来て以来、おそらく一度も手がつけられて

いないであろう、塗料が浮きまくっている天井の掃除を出来るだけやった。今年から、稲垣さんのお骨折りで、ハサップガイドラインに沿った、杵つき餅における衛生管理計画を立て、それに従ってやっていくことになった。一日、たくさんある柚子を少しでもなんとかしたいと、林さんと、彼女の妹さんの秋山泉さんからの提案を受け、秋山さんの指導のもと、柚子ジャム作りをした。稲垣、松島、そして僕も参加した。六kgの柚子を使い、瓶詰めまで商品として完成させた。とても良いものが出来、また作りましょうということになり、四日にせっかく来ていたただいたのに、公会堂のトイレ改修工事の断水の日に当たってしまい、出来なかった。しかし十一日に再び、秋山さんは来られなかったけれど、林、稲垣、倉敷、僕と四人で柚子ジャムを同じように作った。手間はかかるけれど、手作りのものとはとてもいいものです。本

間容子さんも、かつて村で柚子ジャムを作って売られていた。毎年売り切れる人気があった。今度もそうなるといういな。そして餅つきは、八日に始めて、十五、二十一、二十四、二十八日に行った。最後の二回は、つく量が多く、お手伝いの方が大勢来て下さるので、その方々のための昼食を用意できるように越したことはない。しかし、容子さんはもういない。昨年は小島由江さんが引き受けてくださったが、今回は小島真樹さんの身体のことがあったので、事務方の新井通子さんに相談した。そして快く引き受けて下さり、二日間、お雑煮とお野菜付け合せ、きなこ、辛み餅のための大根おろしなど作っていただいた。また、二十日には本間容子さんがあんこ餅のための小豆を煮るために村に来て下さった。村を離れられて以来だったので、僕は会えてとても嬉しく思った。二日間、お雑煮にあんこにきなこ、辛みもちと、皆でおいしく

いただきました。ありがとうございます。二十四日は、白餅十白、玄米餅六白、二十八日は、白餅十二白、玄米餅十一白。一白に糯米を三、八kg使うので、この二日間で約百五十kgの糯米を使ったことになる。参加者は、健康

チエックリストに書き込まれた順番で敬称略、以下の通り。二十四日、稲垣喜弘、稲垣寿美子、樋口和子、長谷川健司、矢萩典行、川辺賢一、山田修一、吉澤伊佐夫、小田切正雄、根塚恵子、平井千香、森山真久、下村一郎、倉敷幸児、新井通子、丸橋ユキ。二十八日、稲垣喜弘、倉敷幸児、川辺賢一、新井通子、小田切正雄、山田修一、矢萩典行、森山真久、根塚恵子、二俣義浩、稲葉江利加、和田東市、小田切和夫、小田切敬子、小林朋子、吉澤伊佐夫。皆さんおつかれさまでした。そしてありがとうございます。餅つきを始めた頃からのレギュラーのような存在で、今、石臼を載せている台を作ってくれた大

工の後藤秀三さんが、春に函館に引越して行ってしまったので、少しさびしくなっていました。そして、小島真樹さんは、二十二日に旅立たれてしまわれたので、またさらにさびしくなっていました。

村に居を移して力を尽くしたいと希望され、村の会でその望みは叶えられず、それでもあきらめずに再び話をし、認められてようやく村の中に住むことになった。空き家を全部見て回り、眺めのいい比較的きれいな家を選んで前久保のアパートから引越しをし、新しい生活を始めてまだ一年と八か月足らず。頭脳と身体を働かせることをやめず、あたかも気合の入った青年のようににもみえた小島さん、本当に残念だ。同時に残念なことは、奥さんの由江さんが、村にはもう、来なくなってしまうだろうなあということだ。西東京市から電車を四度も乗り換えて、小島さんのところへ、村へと来て下さってい

た。筍掘り、竹炭焼き、竹林の仕事の他、何シーズンも田んぼの草取りを手伝っていた。朝日久子さんが亡くなられてからは、本間容子さんの炊事の補助に入ってくださいました。その人柄ゆえ、皆に好かれていたと思う。自分のやりたい事最優先の小島さんが村のなかへの移住を希望したとき、そうなった場合、由江さんにとって本当に良いことなのか？と考えた人は、僕だけではなかっただろうと思う。その時は、小島さんに、「たぶんみんな、小島さんより、由江さんのことを大事に思っていると思いますよ」と言ったのを憶えている。いやあ、ちょっとひどかったかなあ。小島さんは、僕が思っていることをはっきりぶつけても、怒ったりキレたり声を荒げたりするようなことはまったくない、安心の人だったから、生意気にもいろいろなことを言ってしまった。重ね重ね、さびしい。

(小田切正雄)

室	編
	集

令和五年一月号から「新しき村」の編集を引き受けて、本号で五冊目となります。前編集長の小島真樹さんが、昨年一月突然逝去されたので、本号を小島さんの追悼集とすることとし、倉敷さんにお願いたしましたところ、多くの方が

投稿して下さいました。有難うございました。

私の事務所に「新しき村」の雑誌が約三七〇冊あるので、小島さんの村における活躍を知りたいと思い、あらためて目を通しました。「新しき村」は、法人の機関誌として、公益活動の柱の一つとして重要な役割を果たしていることがよくわかりました。村内会員が多いときには村内会員・村外会員からの投稿が多くあり、村の生活や村内会員の方の生活・考え方がよくわかります。現在村内会員が三名となり、村内会員の投稿が少なくなり、そのうえこれまで村内長期滞在者として村を支え、また「新しき村」の編集に関して原稿を集める等に協力してこられた小島真樹さんの突然のご逝去で、「新しき村」を発行するうえで小島さんの協力が得られないことになりました。これからは残された者で力を合わせて発行を継続したいと思っています。

当法人を今後一〇〇年継続できるようにするための公益法人化については、本年二月、埼玉県から公益認定が受けられる見込みですので四月号は公益法人取得の特集号としたいと思います。

(千賀 修一)

原稿募集

会員からの投稿を募集しますので、会員になったきっかけとか新しき村の精神を日常生活にどのような生かしているか実篤の名言等についてお書きくださると良いと思います。

会員以外の方から新しき村に関すること又は実篤の作品・名言等についての投稿お待ちします。

原稿は、五〇〇字～二〇〇〇字・原稿用紙又はワードで作成。ワード作成は横書き・書式自由です。原稿用紙で作成の方は、新しき村まで郵送してください。

ワードで原稿作成の方は、メール (sanga@t-ec.com) で送付して下さるようお願い申し上げます。

「新しき村」編集責任者 千賀修一

新しき村の会員 募集

● 村内会員

新しき村に入村して、新しき村で生活する会員です。入会の要領・その他については、村内会員規則で定めています。ホームページで見てください。

● 村外会員

以下の三種類とし、会費を添えて申し込めば誰でも村外会員となることができます。

- 一 個人会員 新しき村の精神に賛成して入会を希望する個人
- 二 賛助会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を賛助する者。
- 三 維持会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を援助する者。

会員は、会員種別に応じて毎年左記の会費を納入しなければならない。

- 一 個人会員(A)六千円 (B)一万円
- 二 賛助 会員一口 五万円
- 三 維持会員一口五〇万円

会員は、次の特典を享受することができます。

- 一 当法人が発行する雑誌「新しき村」を無料で配布を受ける。また、個人会員(B)・賛助会員・維持会員に対して実篤カレンダーを贈呈する。
- 二 当法人が主催する行事に招待を受ける。

入会を希望される方は、ホームページで入会申込書をダウンロードして新しき村までFAX(〇四九一二九五―五三九八)又は郵送して下さるようお願いいたします。

新しき村の地図



村の近くの県道にバスが通っています。次の番号に電話すると詳しい時刻を教えてください。JR八高線を利用する人には便利です。
042-973-1161 国際興業バス飯能営業所

会費・誌代・寄付 送金振込先

■郵便振替口座

00110-6-182967

一般財団法人 新しき村

■埼玉りそな銀行越生毛呂山支店

普通預金口座 0754078

一般財団法人 新しき村

E-mail: info@atarashiki-mura.or.jp

URL : <http://www.atarashiki-mura.or.jp/>

新しき村 HP

新しき村

検索



新しき村の精神



一、全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させる事を理想とする。

一、その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。

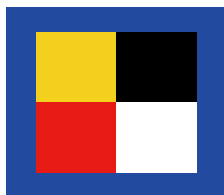
一、その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快樂、幸福、自由の為に他人の天命と正しき要求を害してはいけない。

一、全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとる事で、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を樂しみ正しく生きられ、天命（個性もふくむ）を全うする道を歩くように心

がける。

一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能性を信じ、全世界の人が實行する事を祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である、我等の兄弟姉妹である。

一、されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人々が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。



新しき村 第76巻 第1号

令和6年1月22日発行

発行者 / 武者小路知行

編集責任者 / 千賀修一

デザイン編集 / 山口千穂・写真データ協力 / 稲垣喜弘

発行所 / 一般財団法人 新しき村

〒350-0445 埼玉県入間郡毛呂山町葛貫423番地1

TEL・FAX 049(295)5398

印刷 / 東京カラー印刷

■本誌は会員には無料送付、会員外の直接購読料は1冊300円です。